

オンラインによる日本語教育実習 アメリカとベトナムの学生に対する実践をふりかえって

瀬尾匡輝（茨城大学）

Online Teaching Practicum for Japanese Language Education: Sessions with Students in the United States and Vietnam

Masaki SEO, Ibaraki University

要旨：本発表では、日本語教育副専攻課程の科目で行ったアメリカとベトナムの大学生に対する日本語教育の実習をふりかえり、ZOOM のブレイクアウトルーム機能を用いて小グループに分かれて行う日本語教育の実習の効果や課題を検討する。

キーワード：日本語教育実習、オンライン、海外演習

1. はじめに

これまでのオンラインによる授業交流では、それぞれの大学の教室にデバイスを設置し、それらをオンラインでつなぐ試みが行われてきた（小林・何 2015, シャカル他 2020）。だが、このような形態では、教室内のカメラに映らない参加者の声を拾うことはできない。そのため、特に本発表で題材とするオンラインによる授業交流での日本語教育の実習では、対面時の授業のような学習者とのやりとりができず、シャカル他（2020）が指摘するように、実習生は教師教育で学んだことを生かせず、困難を抱くことがある。新型コロナウイルスの拡大で世界中の大学の授業がオンライン化され、学生それぞれがカメラ・マイク付きのデバイスを持ち、オンラインでつながれるようになった。このことで、オンラインによる授業交流でも、ZOOM 等のブレイクアウトルーム機能を用いて、小グループに分かれて交流ができるようになり、より対面時に近いやりとりが実現されつつある。では、ブレイクアウトルームで小グループに分かれて行う日本語教育の実習では、どのような効果や課題があるのだろうか。本発表では、日本語教育副専攻課程の科目で行ったアメリカとベトナムの大学生に対する日本語教育の実習をふりかえり、小グループに分かれて行うオンラインの日本語教育の実習の効果や課題を検討する。

2. 実践の概要

本発表では、2020 年度開講（2020 年 9 月～2021 年 2 月）の「日本語教授法 I」内で行った日本語教育の実習を報告する。本科目は、茨城大学の日本語教育プログラムを履修する人文社会科学部と教育学部の学生 16 名が受講した。受講生は学期を通してアメリカの大学生に対して 6 回、ベトナムの大学生に対して 3 回日本語を教えた。アメリカとベトナムの方法は、次のように異なっていた。まず、アメリカの実習では、ZOOM のブレイク

アウトルーム機能を用いて、「日本語教授法」の受講生（以下、実習生）とアメリカの学生が 1 対 1、あるいは 1 対 2 の小グループとなり実践した。セッションでは、前半の 30 分を実習生が準備した活動、後半の 30 分はアメリカの大学の教員が準備した活動を行った（写真 1）。ベトナムの実習では、ベトナムではすでに対面授業が行われていたことから、ベトナムの教室にパソコンを設置し、日本側の実習生は各々の場所から ZOOM に参加した。90 分の日本語の授業で 3 つのグループがベトナムの学生に向けて 30 分ずつ活動を行った（写真 2）。

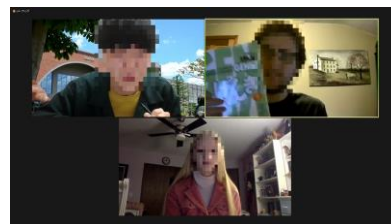


写真 1 アメリカ



写真 2 ベトナム

3. 実践のふりかえり

本実践をふりかえるにあたり、授業及び活動を録音・文字起こししたもの、実習生が書いたふりかえりレポート、実習生へのアンケートを分析し、アメリカ（小グループに分かれて行う実習）とベトナム（教室とつないで行う実習）での実習生の経験を比較した。結果、ベトナムの実習では、先行研究同様に、教室に設置したカメラやマイクが教室の参加者全員の顔や声を拾うことができず、また一部の学生のみが発話する傾向があったため、実習生はベトナム側の参加者それぞれの日本語レベルや興味・関心を把握することができず、活動をデザインすることに難しさを感じていた。一方で、アメリカの実習では、アメリカの学生と小グループで密なやりとりをすることで、相手の日本語レベルや興味・関心を理解し、相手に合わせた活動が準備できていた。そして、ベトナムの実習時と比べて、明確な学習目的を設定し、その目的に合わせた活動をデザインしていた。また、ふりかえりでも、具体的な問題点を提示し、その解決策をグループで話し合っていた。だが、少人数の活動であるがゆえに、教師教育の授業で学んだペア・グループワークを用いることができず、悩む姿もあった。このように、小グループに分かれて行った実習では、学習者との密なやりとりから学習者をより理解することができ、相手に応じた実践を行い、さらにふりかえりを通してその実践を深めることができていた。だが、ペア・グループワークができないという教室での授業とは異なる形態に困難を抱く様子も窺えた。発表では、実践をふりかえり、オンラインによる教育実習の可能性を参加者と議論したい。

参考文献

- 小林幸江・何美玲（2015）「日中韓のスカイプによる双方向遠隔授業の目指すもの—リアリスティック・アプローチの視点から」『留学生日本語教育センター論集』41, 1-15.
- シャカル佳子・池田庸子・瀬尾匡輝（2020）「日米間の E メール交換とズームミーティングによる授業の活性化」『茨城大学全学教育機構 グローバル教育研究』3, 115-121.